

井田仁康著 『社会科教育と地域～基礎・基本の理論と実践～』

本書は著者が研究の中心を交通地理学から社会科教育（地理教育）に移して以降に発表した数多くの論文・著書のなかの30本の論考を、著者の社会科・地理教育論をもとに再整理したものである。学校教育における社会科および地理の重要性を考える、あるいは発信する上で、本書の内容は興味深く、その研究意義は非常に深いものがある。

本書を通した著者の問題意識は、社会における地理の重要性や有用性を教育面でどのように具現化するかにあり、そのことが学校教育における地理および社会科の役割を明確にすることにつながるという点にある。この点は評者も同様の見解をもっており、本書からはそのための解決策の一端を垣間見ることができる。

本書は8章から構成される。1・2章が社会科教育における理論研究、3章が外国研究、4章が社会科と「総合的な学習の時間」などの他教科の関わり、5・6章が地域調査による国内外の社会科教育実践の分析、7・8章が授業実践による成果を分析している。

各章の内容を簡単に整理すると、1章では社会科の軌跡を地理教育の視点から論じ、社会科および地理における学習の基礎・基本を知識、スキル、考察のプロセス、学習プロセスの4つに整理している。さらに、国民教育やグローバル教育とも関わる郷土愛、国土愛および地球的市民（人類愛）の育成には、政治的境界と文化的境界との関係について深く考察させ、アイデンティティ（帰属意識）やグローバル化の必要性を自覚させることが不可欠との視点から、境界についての地理学習の授業案モデルを提示している。また、地理教育においても知識獲得の学習プロセスから態度育成への学習プロセスを重視すべきであるということから、市民的資質と地理教育の関わりについて述べている。

2章では、1章で著者が整理した社会科および地理教育における4つの基礎・基本の統合を「確かな学力」と捉え、GISの学校教育における有効性を検討している。学校教育におけるGISは手作業などのアナログな部分も含めた広義な意味で捉えることが重要であり、従来の授業の延長上にあるものと考え、単に地図の作成（スキル）に利用するだけでなく、分布の要因の考察（考察のプロセス）、資料の収集・整理、分析（学習プロセス）と密接に関わっており、GISを通じ、「確かな学力」を育成することができるとしている。さらに、日本に先駆けてGISを学校教育に積極的に取り入れた台湾の事例をもとに日本の課題を整理している。そして、つくば市立吾妻中学校での授業実践を通じ、「確かな学力」を育成するためのGISの有効性を検証している。

3章では著者が長年、フィールドとしてきたニュージーランドの社会科教育について、その変遷と1990年代以降の教育改革により導入されたナショナル・カリキュラムを分析している。ニュージーランドの社会科では、そのスタンスとして、社会は変化し続けるものだという前提があり、現在までの流れをふまえて、これから予想される未来に対してどう対処すべきか、あるいは現代の課題をどのように克服し、よりよい社会へとどう変化させていくのかといった価値判断、意思決定が重要な学習の要件となっている。この点は著者が日本の社会科・地理教育において価値判断や意思決定を重視すべきであると主張する理論的背景になっている。

4章では社会科と「総合的な学習の時間」の関係を地理教育の観点から検討している。ここでは、社会科・地理教育が「総合的な学習の時間」の拠って立つ学問的な基盤の弱さや、野外調査などの体験活動のスキル、地域をみる視点

を補うことを指摘している。さらに「総合的な学習の時間」が社会科・地理教育において未だ十分ではない態度・価値形成を促す上で重要であることから、両者は相互補完の関係にあることを示している。

5章および6章では著者の国内外での地域調査に基づき、地域に応じた教育について論じている。5章では島嶼部の学校（沖縄県座間味村・東京都青ヶ島村）における子どもの島へのアイデンティティ（帰属意識）や地域への「参加」を取り上げ、過疎地域（広島県芸北地区）では、事例地域での小・中・高一貫教育について検証している。さらに、6章では多文化社会を背景としたオーストラリアの教育について分析している。この点は、「一般的な理論を机上で考えるだけでなく、実際の地域に応じた社会科教育をみていくことが必要不可欠である」（p2）と著者も述べているように、今後の教科教育学の研究において積極的に取り入れていくことが求められる方法論ともいえる。

7章では具体的な社会科授業の工夫を中学校の社会科地理学習における一般的共通性の追及やシミュレーション・ロールプレイングによる意思決定を促す授業、多人数が全員参加できるディベートによる価値判断を下す授業、映画を用いることで、生徒の学習への興味・関心を引き出し、学習効果を高めさせるといった授業を自らの実践を基に提示している。

8章では、社会科（地理）を学習する意味について、景観からその意味を考察させる授業を実践し、その問いへの答えを導出している。すなわち、同じ景色でも知識の増加に伴い、観察者の価値観が変わることで、見方が変わり、その景観の持つ意味が異なるということを学習者に実感させ、社会科および地理の学習には意味があるということを主観的に示すというものである。著者も述べているように、「本実践は地理を学習する意味の一端を実感させられたに過ぎない」（p289）。このため、地理の学習が自己形成や他者の視点、環境への関心といったもの

を喚起し、人間形成において重要な役割を担っていることを学習者に伝える授業を今後も開発していくことが必要であるとしている。

このように本書は、地域と関わりあう理論・実践を重視し、社会科および地理教育に必要な理論研究、外国研究、国内外の地域調査、授業実践といった広範な内容を満遍なく取り上げ、著者の社会科・地理教育論を展開している点に類書にはみられない大きな特徴がある。

特に、評者が重要と感じた点を挙げると、第1に、日本同様に欧米の教育システムを取り入れているアジア諸国の取り組みや導入に伴う課題を検討することの必要性を指摘している点が挙げられる。これは、単に欧米の教育システムを分析するのではなく、一足早く、あるいは同時期に取り入れた他国の状況を検証することで、日本に適合した教育システムの検討や導入に伴う弊害を軽減する上で重要な視点といえる。

第2に社会科や地理教育における地球的市民の育成は、著者の述べる境界の概念とアイデンティティの階層構造の視点を取り入れることにより大きく発展する可能性をもっている点が挙げられる。著者が示した授業案モデルの最後の部分に相当する「郷土愛」「愛国心」から「地球愛」「人類愛」への部分は多少論理の飛躍があり、今後の議論や研究の蓄積が必要ではあるが、地理教育を中心に社会科教育研究者および実践者が向き合っていかなければならない課題といえよう。

そして、第3に価値判断・意思決定を重視する地理教育を構築することの必要性が挙げられる。近年、参加・行動といった態度的側面の育成が重視され、子どもたちが一市民として社会に積極的に関わっていくことが重視されているが、活動それ自体が目的とならないよう、地域の問題を捉えるための地理的な見方・考え方を活かした価値判断・意思決定の場面をどのように学習の中に設定するのかは重要な問題である。また、その際に研究者・実践者は地理の

学習が人間形成においてどういった意味や役割を持つのかを十分に考えることが不可欠といえる。

最後に、1点だけ注文を述べておきたい。著者の示した4つの基礎・基本を基にしたカリキュラムの枠組みは1章に示されているもの(p26)、具体的に著者の考える社会科・地理教育論を体現できるカリキュラム案を各学年あるいは小・中・高といった各学校段階でどのように行うことが適当か提示していただければ、著者の教育論と実践を繋ぐ上でより効果的になっ

たのではないだろうか。

いずれにせよ、本書は、これまでの著者の社会科・地理教育論の集大成であり、社会科教育に携わるすべての人に手に取っていただきたい格好の書といえる。本書に続く実証的な研究を踏まえた社会科および地理教育研究の進展を期待する。

(NSK 出版, 2005 年 11 月刊, 295 頁, 3,400 円)

筑波大学大学院博士課程生命環境科学研究科

林 琢 也